

## 「型を読む」～構造を読み取る力～

平成18年7月5日

武術操身法・遊武会主宰 石田泰史

武術の世界において「型」というものは、ある種の聖域として存在する。聖域であり権威でもあるが故に、その構造がブラックボックス化され、本質の解説が難しいケースも多い。ここでは「型」の持つ意義とは一体何であるかということについて、武術という日本古来の身体文化に隠された心身の協調法を通じて考察してみたい。

一口に武術と言っても、その形態は多岐に渡る。我が国における一般的な武術を大別すると、空手や柔道などの徒手武術と、剣術や槍術などの武器術に分けることができる。徒手武術においては、更に打突系と組討系に分けられ、それぞれの中でスタイルは様々に枝分かれしている。

徒手、武器いずれの系統においても、およそ競技的なものと様式的な意味合いの強いものが見受けられるが、それらのほとんど全てに共通するのが「型」の存在である。

空手の大会において試合と型の二部に分けての競技が行われているのは、巷間によく知られているところであろう。剣道にも試合以外に日本剣道形という組太刀があり、昇段審査などの折に行われているが、競技に使える技術とは一線を画するものである。

さて、「かた」という言葉には「型」と「形」の二通りの標記のしかたがある。いずれを使用するかについて共通の定義はなく、現に剣道では「形」の字を使っており、また古流武術の流派によっては、特に区別なく両方の記述が見られることもある。

本稿では「型＝かた」「形＝かたち」と明確に区別した上で、その比較も含めて論を進めることにする。

筆者が武術の原点としているのは居合術である。抜刀術と称されることもある通り、刀（日本刀）を用いた武術であり、その歴史は四百五十年に及ぶ。その技術体系の大半が単独で演じる「型」によって今日まで伝承されているのだが、対人競技ではない為、それぞれの「型」の解釈が幾通りも存在するのが現状である。敵を想定し、日本刀を抜きざまに切り付けるといふ、現代社会においては極度に非日常的な行為であるが故、実用的な身体操法として認知されていないことが主たる要因であろう。

武術において「型」といえば、一連の対敵動作を想定とした、攻防のシミュレーションであると捉えられることが多い。居合術について言えば、敵の刀の動きを見極めつつ、抜刀を以って制し打ち勝つ技術が「型」として伝えられている。しかし実際の動きそのものを「型」としてしまうと、その本質が非常に見え辛いものになってしまうのである。

筆者の認識するところの「型」とは、記号化された特殊身体操法を解く鍵を、ある種の暗号として組み立てたものであると説明できる。刀をどの角度で抜き、足をどれだけ開き、腕をどこまで下すのか、といった表面に見える部分は、「型」の本質とは大きく離れた、言わば枝葉末節であり、これを「形」と呼び区別しているのである。

「型」に求めるべきは、表面上の結果ではなく、その動きを成り立たせるためのキーワードをどれだけ読み取れるかということだ。相手の攻撃を見た上で対応を始め、逆転して打ち勝つには、非日常的な身体操法の体現が必要である。その為には身体上の複数箇所を同時に認識し、それぞれを並行して制御する感覚が必要とされる。

流派やジャンルに関わらず、古伝の「型」には精度の高い身体運用理論が込められているはずである。そのことに気付かず、表面的に見える動きが「型」とであると誤解してしまうと、もはや武術と呼べる質ではなくなってしまう。それは単に様式の伝承にしかならず、想定（状況設定）を脱しての応用などは望

むべくもない。

結論から先に言うと、「型」とは特殊な身体運用の理論そのものであり、「形」とはその理論を各自の身体を通して表現した結果である。「型」は方程式の如く真理のみで構成されており、そこから派生した「形」には身体性などの違いによる個性が生まれるということになる。このことを誤解した指導者が、枝葉の部分ばかり整えようとしているのが、現代の型武道に多く見られる実態である。理論を踏まえた結果としての個性を認めようとしない姿勢は、武術としての本質を踏み外していると言えぬ。同時に、「型」の踏襲なき個性は、本質を伴わない故に、武術的意義を認められないということになる。日常の生活にあてはめると、「型」とはルールや規範といったものであり、それらの意味を十分に理解した上で遵守してこそ、個性の表現が許されるということである。

「型」というものをどのように捉えればよいかを、もう少し幅を広げて考えてみたい。

先述の通り「型」とは暗号である。居合術の「型」には想定というものがあり、一定の攻防が手順として決められている。その手順を、角度や高さ、速さ、視線など、決められた寸法の範囲で表現することによって第三者の評価を得られるのが、一般的な古流居合術の世界である。しかし本来想定や手順といったものは本質の部分の導き出す為に与えられた情報であると捉えるべきであろう。「型」について本当に考えなければならないのは、なぜその想定や手順を作る必要があったのかということである。

一輪車を与えられた者が、それを発展させオートバイにたどり着いたとしよう。後の人間がその結果としてのオートバイを与えられ、そこから一輪車まで正確に逆をたどれるかということを考えてみると、いかなる必然性がそのものを成り立たせているかということを求める難しさが想像できる。

機械的な物の構造を理解することについては、分解してみるのが一番確かな方法であろう。各部品の関係性を観察し、分析が進めば設計図が描けるようになる。そうやって初めてその機械のメカニズムを知り、基本的な機能を成立させている本質の部分を感じ得るのである。車輪と動力の関わりがオートバイの機械的な本質であり、武術においてはそれが「型」の持つ意味となる。

「型」に秘められた本質が理解できれば、それをどのように再構築して表現するかは、各個人に委ねられるべきであろう。同じレシピに基づいて料理を作ったとしても、本人の意思に関係なく、鍋の大きさや火力の違いなど外的要因によって結果には必ず個性が生まれるものである。レシピという「型」は、近似値を再現するためにあるものであり、決してコピーを求めるためのマニュアルではない。鍋や火力といった諸条件は、即ち体格や身体性の差異として武術に当てはめることができる。

先に「型」とは暗号であり情報であると述べたが、別の角度から見れば、それは「制約」であるとも言える。「型」の手順や想定は本質を導き出す為の制約であると位置付けると、その役割がはっきりとする。

一つ一つの動きに意味があり、それらが渋滞なく連続することで流れが生まれるが、最初から一つの流れとして捉えると、本質がぼやけてしまい易い。できる限り短い動きのセンテンスを単位として明確に認識するほど、「型」は整い、身体上で理論化されるのだ。

世界的なバレエダンサーであるシルヴィ・ギエムが「クラシックの振り付けについて指導する際、『伝統だから』ということではなく、『何故そうするのか』を説明するべきである」という意味合いのことを言っていた。あれほどの突出した感性と身体能力の持ち主をして、一つ一つの動きに明確な意味付けを求めているのである。「型」の世界の深さと、そこに求めるべき意義を感じることものできる言葉であったと思う。

スポーツ的な競技武道は、勝敗という結果を求めることが大義である。それに対して居合術に代表される型武道は何を主眼として行われるかが明確になりにくい。ここで筆者は、「型」の解説から得られる「構造を読み取る力」を養うことが型武道の本意である、と提唱したい。構造を読み取る力とは一つのセンスであるが、それは「型」というものの意義を理解した上での反復稽古によって向上するものであると確信している。センスが良いということは、一つの事象に対して見えている部分が多く、そこから何を選択すれば良いかが分かる状態ではないかと思うのである。

構造を読み取るというのは、関係性を理解することである。機械の仕組みも格技での攻防も、

また他人の気持ちを推し量ることすら、関係性の理解という意味では同質のことであろうと思う。動きの単位を短いセンテンスにするというのは、多極面の関係性を見る為でもあるのだ。

釣り合いや整合性といったものを身体で自覚し表現するのが武術的身体操法である。それを得る為の手掛りとして、当会の稽古では「空間固定」「相対固定」という二つのキーワードを用いている。空間固定とは、身体及び道具の一部分を、文字通り空間上の任意の座標に固定し、動きの起点とするものである。相対固定とは主に体幹部に対して、手足や道具の一部分を位置的に固定し、能動的な動きを抑制することを言う。いずれも身体、道具または相手、空間などの関係性を明確にするものであり、効率的に動く為の制約であると言える。これらを多面的に組み合わせることにより、日常的な動きの延長線上にない動きを実現しようとするのである。

このような基準を元にして、様々な変化のバリエーションを加え、動きを整理したものが当会の「型」であり、居合術としては現在二十数本を定めている。それぞれに一応の想定は作ってあるが、それは手順を覚える為の仮のストーリーでしかなく、手順と理論さえ認識すれば、特にこだわる必要のないものであると考えている。敵がどこからどのように攻めてくるかなど、状況設定を考え出すと際限がないということは簡単に想像のつくことであろう。この二十数本も、理論だけを突き詰めれば、ほんの数本で足りるはずであると思っているが、一方で学ぶ立場を考えると、同じことを違う角度から見る機会が多いほど手掛りをつかみ易いかとも思い、重複を承知でこれだけの数にした。

特殊な身体運用の構造を読み取るには、自らの身体にその規矩(かね)を持つことが最良である。「型」とは規矩を得る為の鍵であるという認識の下に独自の「型」を作るのだが、その作業は理論の分解と再構築、そして実践での検証を繰り返すことであり、自身にとっての最もきつい稽古であると言っても良い。ここでこれまでに述べてきたことについて、実際にはどのように武術の稽古として実践しているのかを、当会のウェブページに掲載している稽古日誌から見て頂きたい。

稽古日誌 平成 18 年 1 月 31 日付

遊武会居合技法「落葉(らくよう)」

相手の打ち込みに対し、左へ一歩移りつつ、柄にかけた右手を空間固定して抜刀し、相手の足元に切先を巡らせ、姿勢を低くしながら内小手を切り上げるという型である。

今回は刀の軌道維持を強く意識することを主眼として稽古を進めた。刀身の変化が確実なものになれば、それを基準とした身体操法も得られようがない。居合術の本質は刀を基準とした体捌きにあるというのが、遊武会技法の考え方である。刀は遣うものではなく、体を変化させる為の規矩であり、それによって得られた身体操法によって刀が有効に働くという結果が生まれるのである。

今日は右への捌きでの替え業も併せてやってみた。一歩横に移りつつ右足前で千鳥を踏むところは左右とも同じである。右への変化の場合は、左足の引きによって鞘引きを延長し、右手を残したまま抜刀する。刀が左腰にある以上、左と右の変化はシンメトリーにはならない。それを意識して、他の型でも応用的な変化のしかたを探ってみてもらいたい。

筆者がかつて学んだ無双直伝英信流居合術という古流居合には、組太刀も含め約五十本の「型」が伝えられている。これを多いと見るか少ないと見るかは、立場や考え方によって意見の分かれるところであろう。元々は二百本近い「型」が存在したらしいが、居合術中興の祖とされる林崎甚助源重信(永禄年間)より数えて十七代目にあたる大江正路(昭和二年没)が現在の内容に整理したと伝えられている。整理するにあたっての基準は今となつては知る術もなく、現在に残る「型」から、大江師が居合術に何を求めたかを推測するしかない。英信流を学ぶ者にとっては、その「型」の存在意義に一度でも疑問を投げかけることが、本質に近づく道になるのではないかと思う。

二百本から五十本に整理された英信流とは対照的に、近代に至って「型」が増え続けた古流武術がある。大東流合気柔術という、合気道の源流にもなった武術である。こちらは基本的に徒手武術であり、単純に英信流と比較することはできないが、「型」というものの捉え方を見る上では非常に興味深い。

現在大東流琢磨会に伝わる「型」は二千八百八十四手あると言われている。この三千近くに及ぶ数の多さ

は、一体何に由来するものであろうか。

大東流における「型」の定義は居合術のそれとは少々異なるものと考えられる。ここに「技(業)」という概念が出てくる為である。

大東流では「型」よりも「技」という言葉が使われることが多いようだ。「型」が動きの本質を伝えるべき情報であるとすれば、「技」はその「型」を踏まえて、相手の動きに応じた結果と考えることができ、先述の「形」と似た位置付けとなる。ただし徒手武術においての結果とは相手を制するということであり、個性の有無は結果に包括されることになる。ここが「形」と「技」の違いと言えようか。

いくつかのシンプルな身体運用理論から、相手の反応によって様々な展開が生まれ、最終的に三千近くの「技」に至ったのであろう。

数的に集約された「型」を学ぶことによって理論を身に付け、自在な変化を体現しようとする英信流に対し、多くの「技」の習得からそれらの共通項を見出すことによって、核となる理論を探し当てさせようとするのが大東流の体系であると考え、両者の立ち位置の違いが明確となるのではないだろうか。いずれにせよ、構造を読み取る力を養う為の、それぞれなりのアプローチであるということだろう。ただし、大阪朝日新聞社の道場にて久琢磨らに「技」を伝えた大東流宗家の武田惣角(昭和十八年没)は、一先ごとに教授料を取っていた為、次第に数を増やさざるを得なかった、というまことしやかな裏話もあるようで、英信流と同様に、今に残る「技」からその本意を読み取ろうとすることこそ、現在の修行者が眼目とすべきところではないかと思う。

武術のみならず、長い歴史を有する身体文化には、「型」という優れた伝承方法が存在すると同時に、そこには形骸化という問題が常に付きまとう。明確な理論として、記号化された身体運用を求めるべき手掛りとなるはずのものが「型」であるが、ここまで述べてきたように「形」や個性といった表面上の情報と混同され、その本質が見えにくいものであるのも確かである。

コンピュータの画像編集ツールにレイヤーというものがある。アニメのセル画のように、複数の絵や文字を重ねて別の画像を作っていくものだ。最終的に何層にも重ねた情報を統合し、一枚の画像としてデータ化するのだが、このレイヤー層ずつが武術においては一つの身体運用理論であり、それらを重ね合わせた結果表現されるのが「型」となる。伝承の経過において無意識にレイヤーが統合され、個々の理論が塗りつぶされた状態が形骸化と言えるだろう。

英信流のように集約された「型」によって特殊な身体運用を身に付けようとするのであれば、一つの「型」は様々な「形」に展開できる質のものでなくてはならない。「型」から理論を引き出すには、レイヤーを統合しないまま身体上に保存する必要がある。「型」の意義を統合化された絵から読み取ろうとしても、曖昧な概念としてしか捉えられず、精神論や心法的な価値観しか持てなくなる恐れがある。「型」にはサブストーリーを付加せず、飽くまでも技術に直結する記号として見なければ、その本意を理解できないものであろうと思う。「型」とは極力デジタル感覚で接すべきものなのである。

構造を読み取る力は、観念だけでは導き出せない。文化の裏に記号化されて隠れている古人の英知を探し当てるのが、そこに至る近道になるはずであると思う。

現代社会における武術の存在意義とは何であるのか、という問いに対する一つの答えが、「型」の中にあると言えるのではないだろうか。

以上